
地獄の刹那

白駒の池

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄の刹那

【Nコード】

N2476P

【作者名】

白駒の池

【あらすじ】

父が残した父宛ての手紙。骨肉腫で死んでしまった父宛ての手紙を、毎夜読みふける母は、一夜にして、白髪となってしまった。どうしても父が理解できない娘は母の留守、母が読みふけるその手紙を読んでしまうのだった。そこに書かれていたのは、父への思いを綴ったある女性からのメッセージだった。父はなぜ、そんなものを残して死んでいったのか。

それぞれに心の支えを探す、父、母、娘の物語。

白鬼となった母

父が死んで、母の髪はあつという間に真っ白になった。まだ40を少し超えたばかりの母だった。小学校を卒業したばかりの私と妹には決して弱みを見せなかった母だったが、父が亡くなった後は、やはり違っていた。

父が骨肉腫だと、母から聞いたとき、私は目の前が真っ暗になったのだけど、母はもつと苦しんでいた。父の足を片方、根元から切断するのだという。そして、再発の陰におびえながら、身障者として生きてゆくその父の姿を、隣にいる母さんだけでは支えて行けそうにないから、

「香澄、あなたも力を貸してちょうだい。」
そう、言われたのは信州の遅い春がやってきて、蓼科の聖光寺の桜がもう少しで見ごろを迎える頃だった。

母と相談して、妹にはしばらく、黙っていようということになったのだが、もうすぐ、足を失ってしまうことをどうやって話したらいいのかと、私はかなり落ち込んだ。母は気丈に頑張り通したと思う。

そんなこんなで大騒ぎしていた1年が過ぎ、やっぱり父は、片方の足を失った拳句に、今度は命を失った。

父が亡くなった時、母は泣かなかった。妹はそんな母を責めた。私も、薄情だと思ったりもした。

だけど、その薄情とも思える母の態度は、女としての虚栄心だったのかと今は思う。

母の髪があつという間に真っ白になり、何かに取り憑かれたかのようにひたすら昔の手紙を読みあさるようになった時、その手紙がなんなのか、こっそり盗み読みをした。

母に

「何かあったの？」

と、聞いても母は決して答えず、あるいは、答えても、

「何もないわ」で、終わってしまう。だけど、言葉通りには受け取れず、母のその態度が、どうしても理解できなかつたのだ。父が亡くなった後、何やかやと母を助けてくれていた、父の同僚である堺良二に会ってくるからと、度々出かけてゆく母の後ろ姿に、私は、嫌な予感を感じていた。

「出かけてくるから。」

その日も、父が好きだった結城紬の着物を着た母は、父の墓前に供えるのだといって、庭で咲いたリンドウの花を手に出かけて行った。

父と母の部屋に入る。そこは、一人の主を失って、部屋の温もりすらなくしたように冷え切った虚無な空間があつた。母は、いつも鏡台の引き出しの中にあるたくさんの手紙を、毎日のように読みあさっていた。そつと、鏡台の引き出しに手をやる。

「あつた…」

それは、父宛ての手紙で、封筒の汚れが、経年を感じさせるものだった。そこには、10通ほどの手紙があつた。でも、母が読んでいた手紙はもつとたくさんあつたように思う。残りは、どこかに母が隠しておいてあるのだろう。

一番上の手紙の差出人を見る。封筒には何も書かれていない。積み重ねられたその手紙には、どれも差出人がなかつた。消印は、「東京新宿」とある。切手は50円が貼られている。ずいぶん昔のもののようにだ、などと思いながら、私は、父へのその手紙を読んできた。

「元気にしていますか。あれから、電話する勇氣がありません。

ふと、あなたの生活を垣間見てしまう、というのは、どうということもなく、過ぎてゆくものだと思っていました。私にはかなりの衝撃を残しています。」

当たり前のことですが、やはり不倫の恋など、テレビのようにきれいにいごとでは済まないのですね。

貴方を守るべきものがあることを私は理解していましたが、そのものを目にしてしまったことで、今まで目をそむけてきた罪悪感が目を覚ましてしまったようです。

貴方から離れるという選択肢を私は持っているのだと、貴方は言いましたね。

その意味を少し考えてみようと思います。しばらく、離れてみましようか……」

その手紙は、中学生の私にも、父が道ならぬ恋をして、現実の生活との狭間に揺れ動いていることが読み取れる。本当に父？。これは一体何？

届けられた本

読めば、父が道ならぬ恋に落ちていたことを容易に察することができた。その日、そこにある10通ほどの手紙にすべて目を通した私は、あまりのショックに震えた。

だが、私は一度たりとも父の裏切りを感じていなかったわけではない。だからこそ、その時の思いも現実のものとなり、母の髪が真っ白になったわけを察したのだった。

そもそも、この手紙の主はだれなのか、男女の機微など感じる事のできない私は、怒りに震えるしかなかった。それくらい、父の男としての部分には、潔癖な年頃でもあった。ただただ、「母が可哀想」という思いしかなかったのである。母が隠したほかの手紙・そう、母はもつとたくさんの手紙の束を自分の足元に置き、毎夜のごとくそれを読み返していた。そんな母の姿を、ふすまの陰からずつと見てきた私は、これ以外の手紙の束がとても気になった。父の事を知りたい、いや、母を苦しみから救いたい、そんな思いに駆られていたのだった。でも、どこにあるのか、その手紙の所在がとても気になって仕方がなかった。

私の妹は父が足を切断した時、なぜ足がなくなったのか、とは決して聞かなかった。それには決して触れまいと必死に父の顔だけを見て、足元に視線を送ることはなかった。そうされることの父の苦しみはいかばかりだったかと思うのだが、今となっては父に聞く術もない。ずいぶん後になって、妹に聞いたのだが、妹もどういう心境だったのか、と言われても答えられないと言っていた。とにかく、「見てはいけない」そう思ったのだそう。妹なりの、気の使い方だったのだと思う。

ある日、あれは父が亡くなる前年の夏の暑い日、妹と二人、父の

病室にお見舞いに行った時のことだ。私は偶然、病院の玄関で、父の同僚である堺良二に出会った。父の見舞いに来てくれたのだという。妹を先に病室へやり、まだ中学生になったばかりだったのに、大人のような生意気な口ぶりで、

「父のためにありがとうございます。」

と、頭を下げた。堺は、私の頭をなでながら、

「もう、大人なんだね。」

そう言って、別れた。

実はあの時、堺良二の瞳に映った、ほんの少しの曇りを、私は見過ごさなかったのだけど、結局そのわけを尋ねることは一度もないまま、今に至っている。訊けなかったのだ。自分の思っていることが怖くて。今も確かめられぬままだ。

病室に入ると、そこには、足を失い、ただ、身体をベットに預けながら、大きな窓に向かつて悲しげに視線を落とす父がいた。そのわきで、まだ、何も知らぬ妹は、たくさんの本に囲まれ、なんだか嬉しそうにしている。こんなにたくさんの本、どうしたのか？と父に問うと、「お見舞いに届いた本を良二が持ってきてくれたんだ」という。子どもながらに、なぜ、お見舞いが会社に届くのか不思議に思ったが、尋ねることもなく終わった。だけど、検査だと言って父が看護婦さんに連れて行かれてしまい、妹と残された病室で、その本が包まれていたのだらう包装紙の上のあて名書きを、私はごみ箱に一瞬見つけた。

とてもきれいな文字だった。すらすらと書かれたその文字はやさしい、だけど、決して弱くはない、そんなきれいな文字だった。

『ああ、これは、女の人からの父への贈り物なんだな』

と、一瞬のうちに理解した。だけど、その女の名前が何だったか私はもう覚えていない。今となっては、その名前を見聞きしたとしても、思い出すことはないだろう。きれいな文字だった。ということだけしか覚えていないのだ。

漠然と、そう、漠然とだけれど、『父には誰かいるのかもしれな

いな』そう思ったのは、その時が最初だ。だけど、母には言わなかった。何より、確証があるわけでもなく、男女の性について経験はなくとも、知っていた私には、母に話すことにためらいがあったのだ。その日、父のところにとくさんの本のお見舞いがあったことを、妹が話すと、母は、

「お父さんは営業マンだったから、いろいろお付き合いのあった方たちが、会社にお見舞いを送ってくださるのよ。ありがたいわね。」と、少し微笑んで言った。

そうか、そうだった。精密機器の営業をしていた父には、全国に取引先の人がいるのだ。本くらい送ってくれる人、仮にその人が女の子であっても、それは決して不思議なんかじゃない。

私は、そう思って、その事実を忘れていたのだった。だけど、そのきれいなでも力強さを感じるその文字は、母が読みあさるその文字のように思われてならない。

父の死

ある、秋の日。父のお見舞いに行くと、病室に父の姿がなかった。看護婦さんに尋ねると、父は

「車いすにのって、携帯電話を持って、屋上に行ったみたいよ。」
と言われた。

何も疑わず、父の後を追うように屋上に行くと、そこには携帯を握ったまま遠くを見つめる父がいた。「お父さん、寒くない？風邪ひくよ。」

そう言ったのだが、

「もう少しここにいる。」と、父は言ったのだった。

「誰かから電話がかかってくるの？」

そう言っていると、さびしそくに笑って、

「いや、もう終わった。」

と、呟いた。

今にして思えば、父が誰か女の人からの電話を待っていたことは簡単に察することができるのだが、

疑いたくなかった私の心は、父の言葉をそのまま信じてしまった。

父のいう終わったの意味を、単純に「電話は終わった」と考えたのだった。

「じゃ、戻ろう」

そう言って、車いすを押しときだった。

「お父さん、軽くなったね…」そう口に出そうになって、あわててやめた。再発の恐怖に私は震えたのだった。

季節がもう一度桜の季節になりかけた時、父はあっけなく逝ってしまった。

その春はいつもの春よりも速くて、東京では4月を待たずに桜は散り始めたのだという。でも、ここは、5月まで満開とはなら

なかった。そんな遅い桜の季節を待てずに、父は逝ってしまった。号泣する妹の手をぎゅっとしっかり握り、母は、気丈なまでに凜として、決して泣くことはなかった。淡々と父の葬儀を執り行った。

だが、それからしばらくして、母の髪は真っ白になった。周りにはみんな、「疲れたんだろう。ゆっくりさせておあげ。」と、私に言った。でも、本当の理由は、あの手紙なんじゃないかと思っていた。母が父の遺品を整理し始め、そうして、急に白髪となった。いろんなことが重なって、とも思ったが、どう考えても、やはり、気持ちにはあの手紙の束に行きついてしまうのだ。

あれから、母は毎夜のごとく手紙を読みあさり、何かを思いつめては、庭の花を切って、父の墓へと出向いてゆく。そうして、時折、堺良二と会っているようだ。母は、何を隠しているのだろう。

死んだ父が自分あての女からの手紙を、母の目につくようなところに残して、病魔にやられた。私は心の中で、そのことがずっと引っかかっていた。どうして、父はそんなことをしたのだろう。訊ける相手は堺良二しかいなかった。

父の七回忌を前にして、ちょうど高校を卒業したばかりの妹が、『妊娠している』と言い出した。もう5カ月だという。東京にでて暮らしていた私は母を責めた。なぜ気がつかなかったのか、と。妹にも相手の名前を言うように、と言ったのだが、決して口にすることはなかった。

言えない相手の子どもなのだ。結婚できない相手なのだろう。妹は妹なりの決心があるようで、働きながら、育てる。と言ってきた。もう墮胎もできない月齢で、結局、妹の涙に、母も私も根負けしてしまい、妹の出産を認めることになった。妹の女としての成長に、私は嫌悪した。

聖光寺の桜

七回忌の日。ほんのわずかな招待客の中に、堺良二はいた。その堺に、私は、

「父の事で話がしたい」と言うと、堺は七回忌の後、急いで東京に行くのだが、少しだけなら、と、聖光寺の境内の中に座って話し始めたのだった。

「父のことを教えてほしいのです。」

「克己のこと？」

「はい」

私がつまづくと堺を見据えると、

「もう、本当に大人なんだな。」

堺はそう言って話し始めた。

「知りたいのは、手紙の主のことだね…」

「母が可哀想で。どうしても父の事を知っておきたいのです。」

「そうか、それなら、お母さんに訊くのが一番なんだが。話せる範囲できみに話すよ。」

「ぼくが離婚したのは知っているよね。ぼくが離婚したのは、妻が浮気をしたからなんだが、どうして、妻が浮気をしたか、きみには想像できるかい？」

実は、夫のぼくでさえよく理解できない。妻はね、「淋しかった」そう言っていたよ。

なんて身勝手な、と思ったけどね、年に半分は出張でね。ぼくたちは子どもにも恵まれなかったし、妻が淋しいというのは、身体のことを言っているのかと思っただが、実は違っていたんだ。どうやら、気持ちだっただけ。ぼくは、ほっただけにしかたからね。

「淋しい」と妻に言われて、漠然と離婚を考え始めた頃だったと

思うが、今度はきみの父親、克己がどうやら、出張先で親しくなった女性と、本気で恋をしていると、ぼくは気がついたんだ。で、忠告したさ。克己にはぼくと違って、きみたちのようなかわい子どもがいたしね。すべてを失うようなことになってもいいのかってね。でも、克己はどんどん深見にはまっていったようにぼくには思えた。相手の女性にぼくは会ったことがあるけれど、その人はね、きみには言い難いが、克己だけを必死に愛していたよ。必要としていたと思う。どんな事情があったかは知らないが、克己はその人に「必要」とされていたんだ。

克己は自分の居場所を探していたんじゃないかな、とぼくは思う。相手の人は、克己より早くに遠い世界に逝ってしまったんだ。それから、克己は足の病気を再発した。あつと言う間だった。支えていたものが無くなったことの証じゃないかな。

さつきも言ったけど、克己は自分の居場所を探していた。きつとね。

ばかな奴だと思うけど、男なんて、みんな意気地無しだからねえ。ほんとうに弱虫なんだよ。

たくさんの手紙を、わざわざ自分の女房の目につくところにおいて亡くなった。それは、早く気付いてくれ、という克己からのメッセージだったんじゃないかな。

ぼくが話せるのはこれくらいかな。何しろ、もう克己に確かめることもできないし、相手の女性も死んでしまったし、本当のところはだれにもわからない。でも、克己は、きみたちのお母さんに、気づいてほしかったんだろうな。自分の離婚と重ねてね、そう思うよ。

長く一気に話して、堺は、ふつと煙草を揺らした。そうして、その紫煙に踊るように、一片の桜が舞い降りた。

「きみのお母さんにも、知っていたのなら、話してくれたらよかつ

た、と、散々なじられた…」

と、堺が言った時、また桜が散った。

「母は、どこまで知っているのでしょうか。」

「同じさ。これ以上、何も知ることはできない。残った手紙も、少しずつ克己の墓前で、きみのお母さんは燃やしたようだから、もう、何も知ることができないんだよ。」

「母が、燃やした？」

「そうさ。読んでは封筒に戻し、涙し、また、読み。そうして、墓前で燃したんだ。何度か一緒に墓参りもしたしね。そう言えば、よくリンドウを持ってきていたな。克己が好きな花だと言っていたよ。」

そう言われて、まだ中学のころ、母が結城紬の着物を着て、リンドウの花を下げて出かけたことを思い出した。父がリンドウを好きだった…。そうだったかな、と思う。私は、父が好きだった花など覚えてもないのだ。

「ぼくが知っていることは、これがすべて。きみのお母さんにも克己が亡くなったところに全部話したよ。」

克己は淋しかったんだ。そんなことで、許せない、そうきみは思うのだろうね。」

私は、黙ってうなずいた。

「でも、お母さんは。きみのお母さんは、克己が自分に伝えたかった事を必死で探しているようだよ。きみたちと向かい合いながら、答えを探しているんだ。わかるかい？」

堺良二のうつむきかけたその横顔に、垂れた髪は、すでに白髪だった。一瞬のうちに白髪に変わった母は、今ではおしゃれ染めをして、あの頃の、もうただ死を待つような老母の姿ではない。なぜだ

るう、少しずつあの頃のショックから立ち直ったのか、若くなつて
いつているような気がする。妹の妊娠にも動じない。父のいない子
の母となる妹も、私なんかより、しゃんとしている。

「妹は元気なのかい？」

「…」

唐突に楓の話になり、私がなぜ？という顔をする。

「いや、なんだか、顔色が冴えなかつた気がしてね。もっと、元
気な子だったと…。」

そう言われ、少し考えて、私は真実を告げた。あと半年もしない
間に、妹には子どもが生まれるのだから。

「えっ」

一瞬、堺は絶句した。瞬間に血の気がひいたように見えた。

「堺さん？」

「いや、ごめん。まだまだ子どもだと思っていたんだ。びっくりし
てしまった。」

「お恥ずかしい。父親のいない子どもを産むのだそうです。やけに
頑固で、父親の名を言いません。」

「お母さんは？お母さんは知っているの？」

「ええ。父親のいない子どもの、おばあちゃんになるようです。」

「そ、そうか。」

堺は腕時計に目をやった。

「申し訳ない。この後、用事があるんでね。これで失礼するよ。」

そう言つて、軽く会釈をして、堺は駐車場の方へ歩いて行った。

堺の様子が変だ、まさか、まさか、楓のお腹の子は…、そう思っ
て、私が後ろを振り向いたとき、もうそこには堺の姿はなかった。

ただ、その時、春の嵐のような一陣の風が蓼科山から舞い降りて、
目の前を、それこそ、桜吹雪が一瞬のうちに翔け抜けていったのだ
った。父が大好きだった茅野・聖光寺のソメイヨシノは毎年鮮やか

に散り耐えて、石畳を桜色に変え続けている。こんな景色を見続けることなく、あつという間の人生を終えた父は、なぜあの手紙を残して逝ってしまったのだろうか。

父の事を私は何も知らないようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2476p/>

地獄の刹那

2010年12月8日23時03分発行